

本書は春日神社に存する約一千八百基の石燈籠の紀年及び施主の一覽であつて、銘の全文を記載せんことを「春日の石燈籠」の序記の部分で、しばらく別冊として發表されたものである。編者は大正十一年に同社の釣燈籠の銘文を調査され、同十三年八月から公務の餘暇に石燈籠の銘文の調査をも試み、十五年四月に其業を終へられたが、先づ石燈籠の分の一覽を作つて置いたが好都合であるとして本書を著はされたのである。其の本文は先づ石燈籠の種類を挙げ、次に石燈籠配置の概觀を記し、次に紀年及び施主一覽を調査順によつて記し、配置略圖二十數葉を其間に交へ、次に石燈籠配置の變動を調べ、最後に時代別の表を掲げてある。元來石燈籠は露天に立ちて數十年乃至數百年の風雨に曝されて文字磨滅し或は苔蒸したものがあり或は互に密接したものがあつて讀字に並々ならぬ困難が有るのであるが編者が根善く多數のものを一々調査された熱心の程は敬服せざるを得ぬ。吾人は更に銘文全部を發表せられる日を待つものである。(和裝膽寫版刷、本文四八枚)(以上松野)

●鳩翁遺稿

柴田富三郎著

石田梅巖の創めた心學がその盛時全國に二百に餘る道場を有したと云はれ、その門流には著聞の人も少くないが柴田鳩翁の名は鳩翁道話と共に一際光つてゐる。昨秋の御大禮に際して聖恩枯骨に及び翁が贈位の恩典に浴せられたのを機會に翁に關する遺稿全集が出た。鳩翁道話としては明治以後に翻刻されたもの十數種に及び、一部は早く英譯されて外國にさへ知られてゐる程である。併し本書は翁の孫及曾孫等一門の人達によつて、親しくその原本について編纂されたのであつて、殊に最後の鳩翁の自傳である「無由言」續編は翁の子武修の反古の裏に書いたもので、種々加筆抹殺された未完稿であつたのを、今度假名遣文字その他の體裁を改めて始めて世に出たものである。この外に翁の年譜も添へられてある。翁の學說や人爲を知るにこの上ないテキストであらう。菊判、本文一六一頁、刀江書院發行、價二、八〇(布村)

●Henri Maspero, La Chine antique

シヤヴァンヌ逝き、ペリオ稍斯學を遠ざかつた今日、

佛國支那學界の權威を推されるコレージュユヘド・フラン
ス教授マスベロ氏の支那古代史が Carvagna 監修の世界
史第四冊として出版されたのは一昨一九二七年の事であ
る。今春教授を本學に迎へ親しく營致に接して感銘新な
際、一言紹介の辭を述べる。

シャヴウンヌを始め最近のカルグレーン、グラネー等
西人の研究は云ふに及ばず我が支那學者の研究まで偏く
その粹を著し、之を貫穿するに組織を以つてし能く一家
の言を成したるもの、四篇二十六章六百餘頁の鬱然たる巨
冊ながら、西人の長とする具體的に事實を見んごする態
度は、飽く迄豊富な想像を伴ひ、生氣ある敘述人をして
一讀卷を掩はしめない。

第一篇第一章原始支那世界は先づ支那古代史の舞臺を
なす土地の簡潔な地理の記述に始り、山地の野蠻人に取
圍まれて、地理的に狭い範圍の内て酷しい氣候と河水の
汎濫とに闘ひながら早く農業を營み、その經驗を獨特の
神話の内に表現して來た中國人の文化世界の孤島の成立
が述べられる。氏は此の原始支那人の人種について之を

北方の蒙古或は滿洲族と見なす事に反對して、その早く
農業文明に入つて居た事を指摘し、その言語は單綴であ
る點から、テイベット語ビルマ語等と共に寧ろシノ、タ
イ語族とも稱すべきであるを主張する。第二章はこの文
化の孤島が歴史時代の始りである殷代となれば、上流の
氏族の貴族政治と農業を營む庶民の二階級の分化が顯は
れ、祭政一致の政治の下に田制、兵制が成立する次第を
述べる。第三章に西周時代の政治史を概観し、第四章「西
周の宮廷と行政」は西周の宮廷生活は野蠻な驕奢に満ち
て居ることとして、狩獵と宴樂、祭祀と舞踊に伴ふ饗宴の生
活を描き出し、かゝる宮廷にて行はれる政務は、周室直
屬の王室領の支配管理と云ふ封建君主としての王の任務
と、封建諸侯の入貢その内争の調停、夷狄の征伐の如き
帝國の統治者としての王の任務とである。周禮等に見え
る整然たる制度は、周の王朝が實權を失ひ、個々の政治
の諸機能の調和だけ強調された象徴的になつたものであ
るに云ふ。

之で第一篇「支那文明の始源」を終つて第二篇「社會及

「宗教的生活」に入る。第一章「古代支那社會は支那古代社會を構成するものは士と庶との二階級でありし、禮不庶民、刑不上大夫」で士は禮の支配する處、庶民は刑の支配する處、庶民は姓なく、祖先なく、二十五家共同に社を祭るのみ、個人として認められず、共同の團體の中に生活し、政治上は全く權利無きに對して、士は姓を有し、祖先の祭祀をなす權あり公務にもつき、個人は此に於て認められるのである。婚姻制度に於ても、士が嚴重な外婚制の下に、祖先の祭を維持するため子孫の繁榮のために嚴重に規定されるに對し、庶民の全く自然人としての生活は歲々の奔こいふ一時的結合をなすのみである。この士庶の二階級に分けて考へる Durkheim は第二篇を通じてイデエである。第二章「古代の宗教、即神話」はこの士以上の貴族階級に保持された古代宗教、神話の内容を説いたのである。第三章「祭官、祭場、及儀式」に於ても、主として政府の祭祀を主る祭官と主として民間に信仰を有した巫と對立して考へられ、第四章には封建君主等の貴族が、その領邑の一般庶民の爲に行ふ季節の

順行を整へる農業の年中行事と貴族が自己の祖先を祭る行事とが區別して論ぜられ、第五章「宗教感情」には以上の社會的官僚的宗教が周末に至つて、士人の間に起源を有する陰陽の思想によつて變形されるに至つた事を説いてゐる。

第三篇、第四篇は各春秋時代、戰國時代の政治史の概説であるが、前の二篇に比して此の二篇は著しく精彩を缺く。退屈な事件の連續以外に之を通じた發展も描かれず、部分的にも新しい卓見が見られない。

最後の第四篇「古代の文學及哲學」に至つて再び氏の得意の壇場に歸つて來る。第一章「文學の起原」は支那古代の文學が宗教的な起原を有する事が詩、散文の兩形式に就て説かれる。詩の小雅大雅頌の起原は周の宗廟の祭祀に於て舞蹈と音樂に伴つて歌はれた聖歌に、散文に於ては、尙書の起原は大史により管理された同じく宗廟の祭祀に當つて催される無言劇の筋書に求められた。此の宗教に淵源する文學の成立から、後の哲學思想が發展して來るのである。第二章以下は此の先秦哲學思想發展の歴

史である。我等は特に第七章「歴史小説と歴史」の戰國時代に歴史的小説が盛行を極め、左傳の如きもかゝる文學を含んで居るこいふ所説に注意を拂ふべきである。歴史的小説の語の代りに物語こいふ語を用ひ、又先秦の諸子に支那特有の語録こいふ文學の形式、更に換語すれば雄辯學の教科書に似た性質を認めるならば、氏の所説も受け入れてよいと思はれる。

最近ヒルトの古代史の邦譯が出版せられた。本書も亦その翻譯が日佛會館の手で企てられて居るこ聞く。その實現完成の一日も早からん事を願ふ次第である。「小川」

●滿州舊蹟志(上下續三冊)滿鐵調査課發行

從來滿州の紹介法は實利的方面に没頭し精神的方面を閑却して居た爲に、既に漢代に支那本部から海陸兩路によつて漢人移住の歴史は頗る古く、一方遼金時代より元明時代に互り幾多の民族の興亡があり、其舊蹟は今尙各所に殘存して居るにか、はらず、唯古往今來茫漠たる廣野であるかの如く速斷されて居るので、滿鐵が大正十一年五六月庶務部調査課囑託八木裝三郎氏に命じ沿線地方

の舊蹟名勝を調査せしめて、其報告として本書が公にされたのである、其上篇(五三七頁)は奉天以南の部分で十三年三月十二日に、奉天以北及び安奉線は合して下篇(五〇九頁)として十五年十二月五日に發行され、其後更に遼西の一部及び遼東地帶の缺漏してゐたものを視察して昭和四年三月二十日續滿州舊蹟志(一九六頁)として公にさるゝに至つた。

滿州に於ける古蹟名勝等の現況を記載して廣く世人の便益に供すべき良書は殆んど絶無な上に、其多少古蹟等にふるゝものは誠に杜撰で、甚しきに至つては地名の沿革を古蹟の部に加ふるものさへあり。又口碑傳説に關する地理的由緒をしきりに列擧するものがあるが、感興は別として學術上には裨益する所が少い。本書の特長は大體に於てこれらの類を除き一方學問上に利益あるこ同時に他方風景の賞すべき價值あるもの、或は美觀上の價值は別として土地の由緒を助くる類を撰定し、更に又世に所謂古蹟名勝の類のみに限らず、學術上古蹟と稱すべきもの、即ち古くは石器時代より順次に古蹟、古陶窯の類を